



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

源氏物語といけばな : 源氏流いけばなの軌跡

著者	岩坪 健
雑誌名	人文研ブックレット
号	69
ページ	6-18
発行年	2020-11-30
権利	同志社大学人文科学研究所
URL	http://id.nii.ac.jp/1707/00027821/

源氏物語といけばな

——源氏流いけばなの軌跡——

同志社大学文学部教授 岩 坪 健

ただいまご紹介に預かりました、同志社大学文学部国文学科教員の岩坪健と申します。本日は露払いつゆばらとして、最初に私が「源氏物語といけばな—源氏流いけばなの軌跡—」と題しまして、お話しさせていただきます。約30分、お付き合いをお願いいたします。

1 「源氏」の由来

いけばなにはいろいろな流派がありますが、源氏流いけばなというのをご存知でしょうか。もしご存知の方がいらっしゃれば、ぜひとも私にご連絡ください。実はもう幻の流派となってしまったのです。

それは18世紀後半に江戸で、千葉龍卜ちばりゅうぼくという人が始めた一派です。なぜ源氏流というかと言いますと、この源氏には二つの意味があります。一つは、清和源氏、清和天皇の流れをくむ源氏です。いろいろな源氏がありますが、数ある源氏の中で、清和源氏が最も格式が高いとされ、征夷大將軍となって幕府を開けるのは、この清和源氏の者に限られていました。

なぜ、源氏流いけばなが清和源氏と関係あるかと申しますと、室町幕府八代將軍である足利義政を源氏流いけばなの祖と仰いだ

からです。足利義政は京都の東山に、銀閣寺を建てました。そして、今からお話しします華道のほか、茶道、香道、この三つが義政の時代に大成されました。というところから、源氏流いけばなでは足利義政を祖と仰いでいます。

二つ目の源氏の意味は、先ほど福田智子先生もお話しされました、紫式部の源氏物語です。源氏物語は五十四帖、五十四の巻からなり、巻ごとにいけばなで表現するという試みを、千葉龍トが初めて編み出しました。いわば、源氏物語といけばなのコラボレーションです。当時の江戸で大人気を博し、一世を風靡しました。しかし千葉龍トが亡くなった後、子孫は断絶して資料も散逸してしまっただけで、と学会では考えられていました。（けれども、そうではないことを後で申します。）そのためか、千葉龍トも源氏流いけばなも、現代では世に知られていません。例えば岩波書店の広辞苑にも、また日本で一番大きな国語辞典である日本国語大辞典にも、掲載されていません。さすがにいけばなの辞典には載っていますが、源氏流いけばなが最高の秘伝とした源氏物語の活け方については、どの辞典も触れていません。

2 源氏物語といけばな

そういうわけで現在では残っていませんが、源氏物語を巻ごとにいけばなで表現するという試みは、今までにいくつかの流派で試みられました。例えば今、画面に挙がっています『源氏・拾花春秋 源氏物語をいける』は、1998年に文英堂から出版されたも

のです。

表紙に二人のお名前が挙がっています。まず、作家の田辺聖子さんが巻ごとに源氏物語のあらすじを紹介され、次に桑原専慶流のお家元である桑原仙溪さんが巻ごとに草花を活けておられます。

この桑原仙溪さんが自らお書きになりました解説の中で、私がとても気になった一節があります。それは、「江戸時代中ごろに作られたとされている『生花 源氏五拾四帖』という伝書」がある、というのです。江戸時代中頃というと、千葉龍卜が活躍した頃です。源氏流いけばなと関係がある伝書かもしれません。

3 東京大学での遭遇

その著書が出版されてから数年後、21世紀初めの頃です。たまたま私が東京大学の図書館に参りました。予定していたよりも早くに、閲覧が終わりました。今ならばスマホで簡単に新幹線の予約を変更できますが、当時はまだ、みどりの窓口に行かないといけません。東大の近くにみどりの窓口はないので、時間つぶしに図書館で紙のカードを検索しました。一冊の本につき一枚のカードに書名や作者などが手書き、またはタイプ打ちで記されています。今ではパソコンで検索しますが、当時の図書館には紙のカードを入れた巨大な引き出しのようなものが置かれていました。現代の大学生は、そのカードを見たことがありませんが、今からわずか十数年前まではそういうカードがありました。

東大の図書館で「源氏」で始まるカードを最初から見ましたところ、たまたま「源氏物語五十四帖、一冊、江戸時代写」というのが見つかりました。貴重書ではないので、すぐにその場で見せていただき、一目見て驚きました。まだ、学会では知られていない、誰も紹介していない写本だったからです。今、画面に映しましたもので、これは若紫の巻です。下段は私が翻刻したもので、実物は上の段です。まず一行目には「若紫」という巻の名、二行目から三行目にかけては光源氏が詠んだ和歌が記され、次にいけばなの図、そして文章が続きます。詳しくはまた後でお話します。

これこそが源氏流いけばなの幻の写本かと思いましたが、通読しても千葉龍卜の名前は見当たりません。千葉龍卜は江戸で活躍しましたが、東大の写本には最後に「播磨^{はりま}の国」（今の兵庫県）と書かれていて、江戸ではありません。これが果たして源氏流いけばなの伝書なのかどうか確定できないまま、また月日が流れました。

4 龍野の円尾家と東京大学

その後、同志社大学に文化情報学部が新たに設置され、次にお話しされます矢野環先生をお迎えました。矢野先生はご趣味としてお茶、お花、お香の達人でいらっしゃる聞いていました。初めてお会いしましたとき、いきなり初対面の方に何うのは失礼とは存じましたけれども、思いきって源氏流いけばなについてお尋ねしました。すると、なんと先生はご存知で、しかもその資料

は兵庫県のどこかの公民館の倉庫の中にあるので見せてもらえなかった、と教えてくださいました。その町は確か「た」で始まる町だ、とおっしゃいましたので、私が思いつくまま、「丹波ですか」「いや違う」「但馬?」「立花?」、ようやく最後に「龍野」だと分かりました。

龍野は現在、兵庫県たつの市になっています。播磨の小京都として有名で、「赤とんぼ」という童謡の歌詞を作った三木露風の出身地ということで、赤とんぼの故郷として知られています。また後にも触れますが醤油しょうゆの生産地であり、醤油まんじゅうが有名です。たつの市のホームページで調べたところ、たつの市立龍野歴史文化資料館があることを知り、早速電話で問い合わせたところ、学芸員の方はご存知でした。「源氏流いけばなの資料は確かにうちにあります。いつでもどうぞ」ということで、飛んで参りました。

部屋で待っていますと学芸員さんが、大きな木箱を二つ台車に載せて運んでこられました。子どもですと、数人が入れるほど大きな箱です。蓋ふたを開けると、中は銀色に光っています。銀紙が貼っているようです。学芸員さんの説明によると、もともとはお茶の葉を入れていた箱でした。茶葉は湿気を嫌うので、湿気を防ぐ働きがある銀紙を貼り、また蓋はきっちり閉まるようになっています。資料も湿気が大敵なので、密閉できる茶箱が代用されたのです。

この資料はもともと、龍野の旧家であるまるお円尾家がお持ちでした。醤油の生産と販売で財を成した名家です。円尾家でいけばなの名

人がおられました。残念ながら四代目で断絶して、ご遺族が寄贈されたのです。

その二つの箱に大量の資料が入っていました。一つずつ見ていくと、東京大学の図書館で見た写本の原本が見つかりました。なぜ、東京大学にあるかと言いますと、その茶箱の中に東京帝国大学から大正2年（1913年）に円尾家に宛てた書簡が出てきました。その手紙の内容は、「円尾家所蔵の秘伝書を拝見したい。また大学に寄贈していただきたい」というお願いです。とはいえ、さすがに家元の自筆本は渡せませんので、弟子が写した本が東京帝大に送られたのです。

5 円尾家と徳大寺家

さて、この茶箱の中をさらに調べますと、円尾家は徳大寺家という京都のお公家^{くげ}さんの庇護を受けていたことも分かりました。徳大寺家は平安時代から続く名家で、『徒然草』にも登場します。ちなみに江戸時代、徳大寺家のお屋敷があったところは現在、同志社大学図書館が建てられています。

ここで謎が生まれました。徳大寺家は京都に住んでいた公家、円尾家は播磨（兵庫県）で商いをしていた家。住まいも身分も全く違う両家が、なぜ結びついたのであるか。

その疑問を解く資料は、徳大寺家の菩提寺にあるのではないかと考えました。その寺院は同志社大学の近くにある十念寺です。ただ、京都は一見^{いちげん}さんお断りではありませんが、見知らぬ者がお

寺に参っても、なかなか貴重な資料は見せていただけません。困っていたところ、ふと、藤原享和先生が十念寺の近くにお住まいであることを思い出しました。藤原先生は当時、同志社高校の国語の先生で、現在は立命館大学教授です。藤原先生に早速お尋ねしたところ、十念寺さんとは同じ町内でご住職とも顔見知りということで、藤原先生のお供をさせていただき参詣しました。

6 十念寺と如来寺

ご住職が過去帳などを調べてくださり、江戸時代に十念寺の住職が龍野の如来寺の住職になったことを教えていただきました。この二つのお寺は宗派が同じで、如来寺は円尾家の菩提寺です。如来寺は有名なお寺で、白壁が川沿いに続き柳がなびいている、という風景が絵葉書にも取られています。ということは、あとは私の推理ですが、十念寺から如来寺に移った住職が、円尾家のいけばなの家元と親しくなり、その見事な腕前が龍野で埋もれるのは惜しいと考え、徳大寺家の庇護を仰げるように働いたのではないのでしょうか。ちなみに円尾家は本家のほかに分家がいくつかあり、いけばなをされていた家はほかの分家と区別するため花円尾家、略して花^{はなまる}円、地元では花円さんと呼ばれていたそうです。

そこで今度は如来寺に参りました。たつの歴史文化資料館の近くにあります。幸いなことにご住職は、最後の家元ご夫妻をご存知でした。家元が昭和48年（1973年）に亡くなられた後、ご夫人から源氏流いけばなの資料をどうすればよいか、相談を受けら

れたそうです。

また、ご夫婦のお位牌いはいが如来寺に祭られていると伺い、お参りさせていただきました。広いお部屋にたくさんのお位牌があり、どこにあるか私には見当もつきませんでした。ご住職はすぐに見つけられました。さすが、と感心しましたが、後でお聞きしたところ、ご住職も最初は分からなかったが、ふと目をやると、そこにあったということです。改めてご縁というか、因縁めいたものを感じました。

7 円尾家と大島家

先ほどの茶箱に、また話を戻します。箱の中に新聞を切り抜いて貼ったスクラップブックが、何冊かありました。その中に昭和30年（1955年）の記事が載っていました。それには円尾家の最後の家元にはお子さんがおられず、このままでは断絶してしまう、由緒ある源氏流いけばなを継ぐ人がいない、と書かれていました。また、昭和34年（1959年）の新聞記事には、同じ兵庫県の赤穂市に住む大島さんが、我が家こそ源氏流いけばなの家元で、それを裏付ける資料がたくさんある、と名乗り出たとあります。

そこで、赤穂の歴史を編纂している赤穂市史編纂室にお電話したところ、学芸員さんは源氏流いけばなのこともご存知で、大島家の電話番号を教えてくださいました。私は失礼とは存じましたが、大島家にお電話しましたところ、昭和34年の新聞に載っておられた大島さん、ときに33歳の方はその後まもなくお亡くな

りになり、その後も資料を大切に保管されておられた大島夫人も最近亡くなられたと知りました。喪中に何うこともできませんので、それきりになってしまいました。お電話に出られたのは、ご子息でした。

8 千葉龍卜の子孫

赤穂市史編纂室の学芸員さんは、また別の重要な情報を教えてくださいました。源氏流いけばなを始めた千葉龍卜が亡くなった後、千葉龍子が跡を継いだ^が、あまり振るわず、千葉龍子には跡継ぎがいず千葉家は断絶してしまい、そのため資料も散逸して残っていない、と学会では見なされていました。ところが、千葉家の子孫は赤穂市に今もお住まいで、資料もお持ちのようなのです。

千葉家の電話番号も教えていただいたので、お電話をしてから千葉家に参りました。当家の当主は室町時代から続く明源寺の住職で、現在は19代目、千葉徹也^{てつや}さんとおっしゃいます。源氏流いけばなの資料を探して^{ください}ましたが、どうも残っていないようでした。源氏流いけばなの活け方を伝えている人もいない、ということで、調査は行き詰まってしまいました。

ところが、その数年後、平成27年(2015年)、兵庫県赤穂市立歴史博物館にて源氏流いけばな展が開催されました。今、画面に出ていますのは、その図録の表紙です。当館の学芸員、木曾ころさんが千葉家、大島家などから大量の資料を集めて展示してく

下さいました。実は千葉家ではその後探したところ多くの資料、しかも千葉龍ト自筆の写本が何冊も見つかったということで、本邦初公開の資料が数多くこの展覧会で展示されました。

9 三段階伝授

さて、源氏流いけばなが源氏物語をどのように取り入れたか、について、これからお話しします。千葉龍トが定めた源氏流いけばなは、三段階に分かれています。まず第一段階では、源氏物語五十四帖にならって、五十四か条の教えを第一条から順に習います。それを約一年かけて、すべて習得します。その後、第二段階に移りますが、これも五十四か条あります。これを会得した弟子に限り第三段階に移り、ここで初めて源氏物語の活け方が紹介されます。源氏物語の巻ごとに有名な場面を草花で表現するのです。千葉龍ト自筆の写本が明源寺にあります。非常に簡単で、具体的なことは何も書かれていません。これは大切なことは口伝、口で伝えて書物には残さないからです。それほど秘伝とされました。

それに対して円尾家の伝書は、詳しく書かれています。具体的に若紫の巻を見ていきましょう。まず、あらすじが書かれています。光源氏が若紫を初めて垣間見たとき、若紫は大切に飼っていた雀が逃げてしまい泣きべそをかいている、という名場面です。次に活け方が記されています。この絵から分かりますように、上中下に分けていけばなが描かれています。

絵の上段には笹を活けていますが、笹に限らずまっすぐ高く伸

びたものを一本活けなさい、と指示しています。中段には白か黄色の花を一本挿しなさい、とあります。なぜ白か黄色かは、後でお話します。下段には赤か紫の美しい色の花を一本、少しうつむくように花を下に向けて活けなさい、と書かれていて、その理由は今から申します。

まず上段の高く伸びた笹は、逃げた雀を表わします。雀は空高く逃げていったので、背の高い草花を使って表現するのです。中段の白か黄色の花は、若紫を育てていた祖母の兄になぞらえます。そのお兄さんは僧侶で、その人が住んでいたお寺で、若紫は光源氏に見出されたのです。なぜ白か黄色かという、お坊さんなので、そういう地味な色の花を使うのです。下段の赤か紫の花は若紫で、うつむくように活けるのは、泣きべそをかいているからです。このように、この場面を三種類の草花を用いて、雀・僧侶・若紫に例えているのです。

源氏物語は五十四帖あるので、このような図が五十四図あるはずなのに、東京大学の転写本も円尾家の自筆本も六図足りません。六つの巻が欠けています。調べた結果、源氏流いけばなでは五十四帖のうち六帖を秘中の秘として特別扱いましたのです。源氏物語を活けるのは最後の第三段階で、活け方そのものが秘伝とされましたが、さらに五十四帖のうちの六帖は秘伝の中の秘伝として、別の写本にまとめて記されていました。別冊仕立てになっているのです。その別冊も茶箱の中から見つかりました。

10 大島家の源氏流いけばな

源氏物語に関する大島家の資料は円尾家の説を取り入れ、さらに追加しています。その一部を簡単に紹介します。例えば若紫の巻ですと、藤の花を活けてもよいとあります。若紫は藤壺の姪に当たるので、藤の花で藤壺を表現するのです。また、光源氏が若紫を垣間見たところには滝が流れている、と物語にあります。その滝を表現するのに糸柳か糸桜を使いなさい、と指示しています。

この大島家ご所蔵本は非常に面白いので、現在、同志社大学の大学院の授業で輪読しています。筆で書かれた本文を活字にして現代語訳と解説も付け、同志社大学文学部が毎年刊行している雑誌『人文学』に連載中です。この雑誌は学術リポジトリになっており、パソコンあるいはスマホでも見られます。

源氏流いけばなをもっと知りたいという方は手前味噌になりますが、去年の11月に平凡社から私が本を出しましたので、ご覧いただければと思います。実は今日の講演のタイトルも、福田智子先生から何にするかと言われまして、早く決めないといけないので、小著の名前『源氏物語といけばな 源氏流いけばなの軌跡』をすっかり引用しました。1冊1,000円です。

さらに詳しく知りたいという方は、これは専門書ですが、2013年に和泉書院から刊行しました『源氏物語の享受 注釈・梗概・絵画・華道』をご覧ください。それは第15回・紫式部学術賞を受賞しました。その小著には東京大学の図書館で私が偶然見つけた写本の原本、すなわち円尾家の家元が文章と図を記したものも、

すべて載せております。また、秘中の秘とされた六帖は家元自ら彩色しており、それはカラー写真で口絵に使わせてもらいました。

というわけで、現在では幻となってしまいました源氏流いけばなについてお話しいたしました。そういえば、お祖母^{ばあ}さんが習っていたとか、なんかこんな資料があるという方がいらっしゃれば、ぜひとも私の方にメールでお知らせくださればと思います。

そろそろ時間になりましたので、これで私のつたない話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。